

中津藩三御領の支配

豊前国下毛郡中津におかれた藩で、天正 15 年(1587)に 黒田 孝高 が入部し、 細川氏 、 小笠原氏 と藩主が入れ替わり、 譜代 の 奥平氏 が明治 4 年(1872)の 廃藩置県 まで支配する。

〈**黒田氏**〉 黒田孝高は、 豊臣秀吉 の九州征伐に参加し、その功で豊前国 京都(みやこ)、中津、築城、上毛(福岡県)と宇佐、下毛の 6 郡 12 万 5,000 石を天正 15 年(1587)に与えられ、中津藩が成立する。孝高は、領内 検地 や城づくりに取りかかるが、領内の土豪 宇都宮氏 の反乱の鎮圧、 朝鮮出兵 、 関ヶ原の戦い など、あわただしく、城が完成することなく福岡へ転封する。

〈**細川氏**〉 関ヶ原の戦い後、丹後田辺 11 万石から 細川 忠興 が 忠利 とともに豊前一国と豊後国 2 郡(国東 速見)39 万 9,000 石(1 説には 32 万石)の領主として 慶長 5 年(1600)入部する。蔵入地(細川氏直轄領)9 万石、家臣団への給地 30 万石にわけている。元和 8 年(1622)には、領内に「 人畜改帳 」の作成を命じ、農民からの 夫役 徴発の基礎史料を作成した。その他、 城下町 づくりにも力を入れている。寛永 9 年(1632)肥後熊本 54 万石へ転封した。

〈**小笠原氏**〉 寛永 9 年(1632)~享保元年(1716)までの間、中津藩を支配する。細川氏の後を受け 播磨国竜野(兵庫県)より 小笠原 長次(ながつぐ)(譜代)が、上毛、下毛、宇佐 8 万石に入部する。領知構成は下毛郡 82 か村 3 万 19,67 石、上毛郡 19 か村 6,647 石、宇佐郡 124 か村 4 万 1,385 石である。寛永 14 年(1637)に起きた 島原の乱 の鎮圧に、中津藩も 3,200 人余を動員し、 大庄屋 17 名も出兵している。小笠原時代は失政が多く、藩財政が悪化してくる。そのため郡代 岩波源三郎 が、財政立て直しのため延宝 6 年(1666)「 岩波の新法 」と呼ばれる改革を行う。103 条からなる命を出し、家臣の 地方知行制を廃止し、蔵米制に替え、新税を設けている。その他、諸 運上 の増加、港出入の物品に関税を課し、 宇佐神宮 の 参詣(さんけい)人や通行人から通行税を取ったり、芝居や酒宴を禁じ、仏事供養の禁

制、神社の祭まで差し止めたりしている。その上、訴訟は取り上げないものであった。(『 四日市村年代記 』)しかし、岩波らの努力のかいもなく、財政はひっ迫して行き、元禄 11 年(1698)には、大阪の 鴻池ら 14 人の大坂商人に 150 貫程借銀している。

〈奥平氏〉 小笠原氏が、失政、乱行、世嗣断絶のため 改易(かいえき)され、享保 2 年(1717)譜代 奥平 昌成(まさしげ) が、丹後宮津から中津 10 万石に入部する。9 代 154 年間、廃藩置県まで続く。奥平 10 万石は、小藩分立 の大分県の中では、最大の 石高である。その領知構成は、豊前上毛郡 19 か村 7,089 石、下毛郡 61 か村 2 万 4,144 石、宇佐郡 84 か村 3 万 841 石、豊前領は、城附 4 万石と宇佐郡の添地とにわけられている。筑前国 怡土(いと)郡 29 か村 1 万 7,908 石、備後国甲 怒、神石、安那郡 36 か村 2 万 15 石で、大分、福岡、広島 の 3 県にまたがっている。そのため「三御領」といわれている。「享保 2 年から幕末までの 150 年間、神石郡は分割統治され、幕領と豊前中津藩の所領であった。中津藩は神石郡 37 か村中 22 か村、甲奴郡 12 か村、安那郡 2 か村を領とし、備後地方の代官所を小島(三和地域)に置いた。嘉永 5 年には、古川村(神石地域)を除く上豊松ほか 14 か村が、福山藩領に編入された。」このように城下のある中津近辺と遠隔地の飛地を領するため、支配する側にとっては支障があったようである。昌成は、入部すると、町方へ 23 か条、村方へ 27 か条の「定」をだしている。内容は、治安維持、質素儉約を基本としたもので、領内の人口を確保するために婚姻は必ず町奉行や代官の許可が必要とされたりする。その他、竹木の伐採、放火、水防等にあたるものがある。年貢は、豊前領が 7 公 3 民、備後領 4 公 6 民、筑前領 3 公 7 民(『中津の歴史』)といわれている。領地が分散しているため、年貢徴収が円滑に行われておらず、主な財源は、豊前領である。宝暦 2 年(1752)からは、郡(こおり)奉行 梅田伝次左衛門 が中心となり、宝暦の改革 が行われている。「郡中江申渡」を村方へ出し、自給自足と村の困窮の立ち直りを目指したが失敗した。文化 11 年(1814)~文政 3 年(1820)にかけては、300 間の堤の築造によって 47 町 7 反の 龍王(りゅうおう)新開(中津市)が完成している。その後幕末にかけて、海岸部の 新田開発 が多く行われている。産業は、文化 9 年(1812)古博多町の植木屋与市らの願い出によって和傘を特産品として奨励している。文化 9 年という年は、中津藩で最大の大火 一揆 がくりひろげられた年でもある。前年の 11 月 岡藩 で起きた一揆が波及してきて、添地の

板場、松木組(安心院町)から騒動が起き、城下へ押し入ろうとした農民に、藩の鉄砲隊が発砲し、死者3名を出している。文化面では3代藩主昌鹿の蘭学奨励もあって、前野良沢、村上玄水、大江春塘、福沢諭吉など多くの文化人を輩出している。村上玄水は、藩の典医の家に生まれ、文政2年(1819)日本で2番目、大分で初の人体解剖を行い、その結果を『解剖図説』にまとめている。また、シーボルトの門下生となったり、高野長英と親交があったり、中津藩の砲術の開祖としても有名である。明治4年(1872)中津県となり、同年8月小倉県、明治9年(1877)4月福岡県、同年8月大分県に編入される。

[佐藤 香代]